

梶 遺 跡

2002年3月

大阪府教育委員会





梶遺跡の南から
淀川・北摂方面を望む



B区 古墳検出状況



B区 中世掘立柱建物と大溝

B区 中世墓



鳥帽子出土状況



E区-1
大溝の断面



E区 噴砂の断面



F区 噴砂の断面

梶 遺 跡

2002年3月

大阪府教育委員会

はしがき

守口市は、近世では京都と大阪を結ぶ京街道の4番目の宿場町として有名ですが、地形的には淀川左岸の低湿地帯にあたり、水田や蓮根畑が広がる地域で、かつては人々の居住には遙かず近世以前の遺跡の希薄なところと考えられていました。1980年代に大庭北遺跡の発掘調査によって古墳や中世集落跡が発見され、また八雲遺跡の発掘調査では弥生時代の玉作り工房跡を伴う集落跡が発見されました。さらに1990年代になると、梶遺跡内で形象埴輪や装飾付壺を伴う帆立貝式古墳が発見・報告されました。

このようにここ十数年にわたる調査の結果、多くの遺跡が発見される等、これまでの予想をくつがえして古くから人が活発な活動をしていたことが明らかになってきました。

今回、梶遺跡内にある府営住宅建替工事に先立ち発掘調査を実施したところ、古墳や中世の集落跡、墓、地震に伴う噴砂跡などを検出し、多くの新知見を得ることができました。これらの成果は本書に報告するところであり、地域史解明の上で貴重な資料になるものと確信しております。

調査に際しては、多くの方々に御協力をいただいたことに厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成14年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は、府営庭園金田住宅建替工事に先立ち、大阪府建築都市部の依頼により大阪府教育委員会が実施した梶遺跡発掘調査の報告書である。
2. 調査は文化財保護課技師辻本武を担当者として、現地調査を平成12年7月から翌13年1月まで実施し、並行して整理作業を行い、平成14年3月に終了した。
3. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
4. 本調査の写真測量は、(株)アスコに委託した。撮影フィルムについては同社において保管している。
5. 調査を進めるにあたっては、地元自治会、守口市教育委員会、門真市教育委員会、佐太天神社をはじめとする多くの諸機関・諸氏より多大なご協力を賜った。

また噴砂の調査の際には独立行政法人産業技術総合研究所活断層研究センターの寒川旭氏、鳥帽子の調査の際には(財)大阪府文化財調査研究センターの岡本圭司氏よりご指導とご援助を賜った。

記して感謝する次第である。

6. 本書の執筆・編集は、辻本が行った。

目 次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 地理的環境	1
第3節 歴史的環境	1
第4節 梶遺跡および周辺遺跡における既往の調査	3
第2章 調査の成果	
第1節 調査区の設定	6
第2節 基本層序	7
第3節 A区の調査	7
第4節 B区の調査	10
第5節 C・D区の調査	16
第6節 E区の調査	18
第7節 F区の調査	19
第8節 出土遺物	21
第3章 調査のまとめ	
第1節 古墳時代	24
第2節 中世	26
第3節 噴砂	28
付章 松浦武四郎の石碑	30
報告書抄録	36

図版目次

- 図版一 梶遺跡遠景
- 図版二 梶遺跡調査区全体垂直モザイク写真
- 図版三 A区垂直写真
- 図版四 B区東半部垂直写真
- 図版五 B区東半部全景
- 図版六 B区西半部全景と遺構
- 図版七 B区西半部とF区垂直写真
- 図版八 B区掘立柱建物柱穴の発掘
- 図版九 B区中世墓
- 図版十 C・D区とE区垂直写真
- 図版十一 C・D区全景
- 図版十二 E区全景と遺構
- 図版十三 F区全景と遺構
- 図版十四 B・E・F区人溝断面
- 図版十五 梶遺跡出土遺物（1）
- 図版十六 梶遺跡出土遺物（2）
- 図版十七 噴砂の砂脈断面写真
- 図版十八 大庭北遺跡の噴砂跡垂直写真
- 図版十九 大庭北遺跡出土遺物
- 図版二十 府下に遺存する松浦武四郎の石碑
- 図版二十一 関西における松浦の石碑

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

大阪府建築部（現建築都市部）は、守口市佐太東町所在の府営庭園金山住宅の建替えを計画したところ、当地は周知の梶遺跡の範囲内であった。大阪府教育委員会は計画を受けて、1998年11月に試掘調査を実施したところ、中世の遺構・遺物を認め、遺跡であることを再確認し、よって当工事に先立ち発掘調査が必要であると判断した。

教育委員会は建築都市部と協議を重ね、発掘調査を実施した。調査は現地での発掘を2000年7月より開始し、翌01年1月に終了した。引き続いて整理作業を行い、年度を越えて02年3月に本報告書刊行をもって調査は終了した。

第2節 地理的環境

守口市は、北を淀川に接し、また京都と大阪を結ぶ街道上にあり、水運・陸運ともに重要な交通の要所である。しかし梶遺跡周辺は淀川左岸に広がる氾濫原で、標高2.3m前後の低湿地となっており、2~30年前まではあたり一面水田と蓮根畑の風景であった。今でこそ多くの住宅や商店が建ち並んで住み良くなっているが、かつては居住するには決して良好な環境とは言えない所であった。

このような地形のために、従来は遺跡の希薄な地域とされてきた。しかし、ここ十数年の調査の進展によって多くの遺跡が発見され、かなり古くから人間が活動した痕跡のあることが判明した。

梶遺跡はこのような地理的環境のなかで、わずかな微高地に形成された遺跡と言うことができるだろう。

第3節 歴史的環境

守口市を中心に門真市や寝屋川市等を含めて、遺跡の動向について時代を追って説明していくたい。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡のほとんどは、寝屋川市東部、四條畷市、大東市東部などの生駒山系西麓部に点在する。太秦遺跡（22）、高宮遺跡（23）、讃良川遺跡（26）に国府型ナイフ形石器の出土が報告されている。

縄文時代

縄文時代になると前期末の高宮遺跡（23）が出現する。中期では讃良川遺跡（26）が府下では大規模なもので、多量の縄文式土器・石器・動物の骨等々が出土し、貯蔵穴が発見されている。後期では西山荘・八雲東遺跡（4・5）で深鉢と浅鉢の出土が報告されている。

弥生時代

弥生時代にはいると遺跡の数は激増する。守口市内では前期末～中期の八雲遺跡（3）がある。玉や玉作り工具等が多数出土し、また石材が鉄石英・瑪瑙等で近畿地方にないものが多い。守口市以外では、森小路遺跡（8）・高宮八丁遺跡（20）・雁屋遺跡（37）が大規模なもので、拠点集落とも言われている。

他に特徴のある遺跡を挙げると、10基以上の方形周溝墓群を検出した古川遺跡（10）、焼失家屋を発見した高柳遺跡（15）、青銅器鋳型が出土した楠遺跡（17）、弥生式土器とともに刳り舟が出土した三ツ島遺跡（46）がある。また門真市と四條畷市内では銅鐸の出土があった。



① 梶遺跡	② 大庭北遺跡	③ 八雲遺跡	④ 八雲東遺跡	⑤ 西三莊遺跡
⑥ 橋渡山遺跡	⑦ 長池町遺跡	⑧ 森小路遺跡	⑨ 善賢寺遺跡	⑩ 古川遺跡
⑪ 常称寺遺跡	⑫ 大和田遺跡	⑯ 伝茨田堤	⑭ 宮野遺跡	⑮ 高柳遺跡
⑯ 池田西遺跡	⑰ 楠遺跡	⑯ 池の瀬遺跡	⑯ 寝屋遺跡	⑰ 高宮八丁遺跡
㉑ 法復寺遺跡	㉒ 太秦遺跡	㉓ 高宮遺跡・高宮庵寺	㉔ 長保寺遺跡	㉕ 小路遺跡
㉓ 調良川遺跡	㉔ 更良岡山遺跡	㉕ 忍ヶ岡古墳	㉖ 忍ヶ岡駅前遺跡	㉗ 砂遺跡
㉕ 奈良田遺跡	㉖ 南山上遺跡	㉗ 岡山南遺跡	㉘ 正法寺跡	㉙ 中野遺跡
㉙ 奈良井遺跡	㉙ 雁屋遺跡	㉙ 北新町遺跡	㉙ 茅谷古墳群	㉚ 宮谷古墳群
㉚ 北条西遺跡	㉚ 三箇遺跡	㉚ 御領遺跡	㉚ 水野遺跡	㉚ 新田遺跡
㉚ 三ツ島遺跡	㉚ 西詰福遺跡			

第1図 周辺遺跡分布図

古墳時代

生駒山系西麓部には豎穴式石室をもつ忍ケ岡古墳（28）や中～後期の太秦古墳群（22）、横穴式石室をもつ墓谷古墳群（39）、宮谷古墳群（40）など多くの古墳が知られている。

守口・門真市という低地では古墳はないとされてきたが、ここ十数年の調査の結果、梶遺跡（1）や普賢寺遺跡（9）で形象埴輪等を多く伴った5世紀後半の古墳が、大庭北遺跡（2）では6世紀後半の古墳が発見された。

集落としては、前期では高宮八丁遺跡（20）、法復寺遺跡（21）、長保寺遺跡（24）、讚良川遺跡（26）等の遺跡から庄内式土器や布留式土器の出土をみている。中期では楠遺跡（17）、長保寺遺跡（24）、中野遺跡（35）、奈良井遺跡（36）等々の著名な遺跡が多い。また後期では中期に加えてさらに池山西遺跡（16）、奈良田遺跡（31）等々が知られている。

奈良・平安時代および中世

高宮廃寺（23）は白鳳期創建とされる。また正法寺跡（34）も古代寺院として著名である。集落跡は、橋波口遺跡（6）、池田西遺跡（16）、長保寺遺跡（24）など数多く存在している。

なお今回の調査区は、旧地名では茨田郡大庭二番あるいは四番に相当する。「大庭」という地名は、行基年譜に「河内國茨田郡大庭里」が出ており、奈良時代からの地名であった。また12世紀の三善為康編『朝野群載』に「掃部寮大庭庄」が見える。掃部寮は「かもんりょう」と読み、宮内省に属し、『国史大辞典』によれば「宮中の儀式・公会の座を鋪設し、それに必要な薦・席・牀（とこ）・簾（すのこ）・苫（とま）・疊などを扱い、また洒掃にあたった」役所である。この掃部寮が領有する荘園として、大庭庄は著名である。

鎌倉時代になると、箕面市所在の勝尾寺文書に「大庭庄」に属する土地の売買や同寺への寄進について記された資料が多く出てくる。大庭庄という荘園は、徐々に勝尾寺の領有するところとなつたことを示すものだろう。

第4節 梶遺跡およびその周辺遺跡における既往の調査

梶遺跡の本調査区より北東に100m離れた大庭北遺跡で、1983・85・86年に3回の発掘調査が実施された。

1983年は府営庭窟大庭北住宅建替に伴う調査で、本府教育委員会が実施した。古墳時代後期の土器列や平安時代後期～鎌倉時代の井戸、溝、里道跡などが検出された。遺物としては、中世の瓦器碗や土師器皿、羽釜が出土している。特記すべきものとして、花押と年号名のある木簡がある。年号は正和4年（1314）である。報告者はこの木簡を制札の類と推測している。

1985年は前々年に引き継ぐ府営住宅建替に伴う調査である。古墳時代の土壙や12世紀の掘立柱建物跡、13世紀の井戸などが検出された。特記すべき出土遺物として「美濃」刻印の須恵器がある。これは奈良時代に岐阜市芥見の老洞古窯で生産されたことが明らかなものである。当時としては府下で初めての発見であった。後に大東市北新町遺跡で出土したものと含めて大阪では二点の出土しかない。また地震に伴う噴砂が明確に検出された。これも大阪では最初の発見例であったが、当時は地震考古学が知られていない時期であったため全く注目されず、従って報告もされなかったものである。

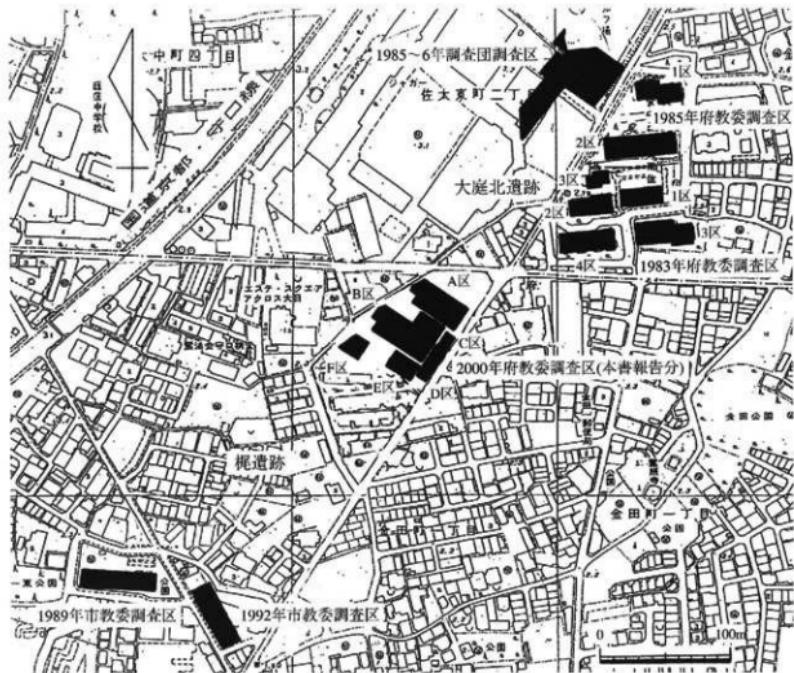
上記の調査区の西隣で工場建設が計画されたため、それに伴う調査が1985年末から翌86年にかけて実施された。調査主体は守口市教育委員会が設立した大庭北遺跡発掘調査団（調査部長漸川芳則）である。一辺15mほどの方形古墳と、古墳時代の土器棺、13世紀頃の溝群が検出された。

梶遺跡の範囲内では、1989年・92年に発掘調査が実施されている。

89年には本調査区より南へ約250mにある市営住宅桜第一団地の建替え工事に伴い、守口市教育委員会が発掘調査を実施した。3基の古墳が検出され、そのうちの1基は帆立貝式のもので、多くの形象埴輪や装飾付き壺が出土して、かなりの注目を浴びたものである。



第2図 梶遺跡周辺の既往の調査



第3図 梶遺跡・大庭北遺跡発掘調査区位置図

92年には前述の建替え工事に引き続く発掘調査で、同じく市教委によって実施された。近世以降の建物跡や木桶を検出している。

本調査区より南に1.4km離れて普賢寺遺跡がある。1984年に古川橋駅前区画整理事業に伴う発掘調査で、平安時代後期～室町時代の密教法具、銅製小仏像、多量の瓦、柿紋、絵馬などが出土した。

また85年にはその北側隣接地で、門真市教委による発掘調査が実施され、前期の弥生式土器や円筒埴輪が出土している。

2000年の区画整理に伴う調査では、径30mの円墳と考えられる古墳を検出し、府下では類例の少ない盾持人埴輪や円筒埴輪など多くの遺物が出土し、大きな成果を得た。

普賢寺遺跡の東隣にある古川遺跡では、98年の市教委による調査が実施された。弥生時代前期末～中期の時期で、10基以上の方形周溝墓群が検出された。

(参考文献)

- 『大庭北遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 (大阪府教育委員会 1984年3月)
- 『大庭北遺跡発掘調査概要・Ⅱ』 (大阪府教育委員会 1986年3月)
- 『大庭北遺跡』 (大庭北遺跡発掘調査団 1986年)
- 『北新町遺跡発掘調査報告書』 (大東市教育委員会 1994年11月)
- 『桙遺跡』 (守口市教育委員会 1991年3月)
- 『桙遺跡第二次発掘調査概要』 (守口市教育委員会 1994年3月)
- 『普賢寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 (門真市教育委員会 1990年2月)
- 『普賢寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ』 (門真市教育委員会 1991年12月)
- 『古川遺跡』 (門真市教育委員会 1999年1月)
- 『普賢寺古墳』 (門真市教育委員会 2000年6月)
- 『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報・2』 (大阪府教育委員会 1999年3月)

第2章 調査の成果

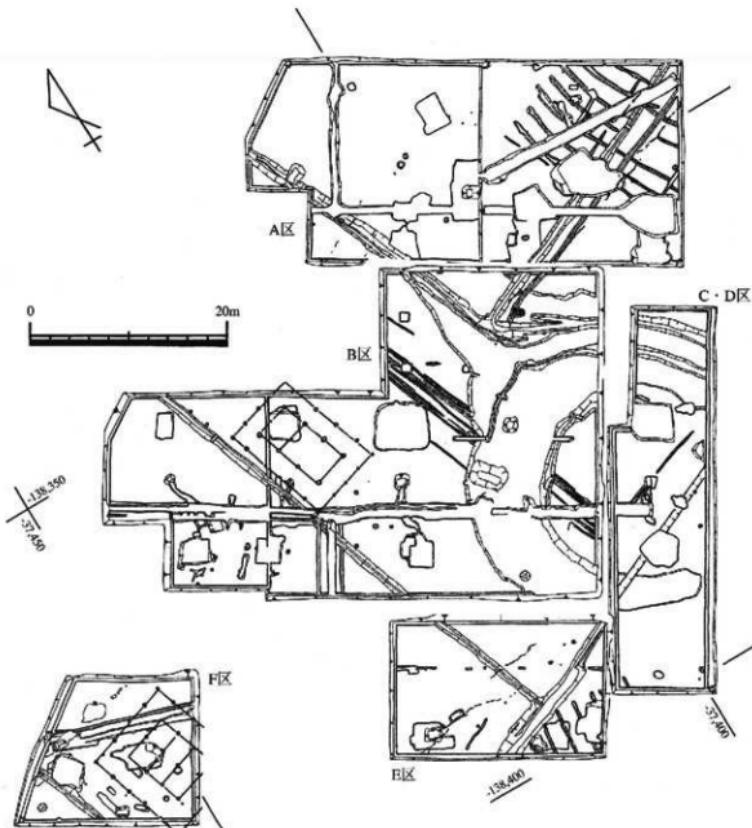
第1節 調査区の設定

調査区は北から順番にA、B、C、D、E、F区と名付けた。しかしC区とD区は、0.2mしか離れておらず、迅速な調査工事を進めるため、両調査区を一体化して発掘調査を施工した。よってこの調査区を「C・D区」と並列して呼ぶことにした。

当調査工事用地内で工事車両が通る道路スペースを確保するため、A区とB区は東半部、西半部と二分割して発掘調査を施工した。

また調査工事の進行を効率よくするため、A区東半部とC・D区、B区西半部とF区、A区西半部とE区、B区東半部と四工程に分けて、順次に施工した。

当用地は住宅密集地内にあり、周辺に商店や医院が多い地域である。よってヘリコプターによ



第4図 調査区の設定と造構全体図

る写真測量ではなく、レッカによる
写真測量を行なった。

第2節 基本層序

① 盛土：府営住宅建設時（1950年代）

に盛られた土および同住宅解体時
(2000年)に発生したガラ等の混入土
である。層厚は0.6~0.8mである。

② 旧耕作土：府営住宅建設以前の耕作 土である。断面では波状を呈してお り、畑の歴であったことが分かる。

③ ②に伴う床土層。

④ 灰黄色粘土 (2.5Y 6/2)。

⑤ マンガン粒を多く含む灰色粘土 (5Y 6/1)。

調査区全体に見られる土層。マンガン・鉄分
粒が灰色粘土中に薄く堆積したものである。

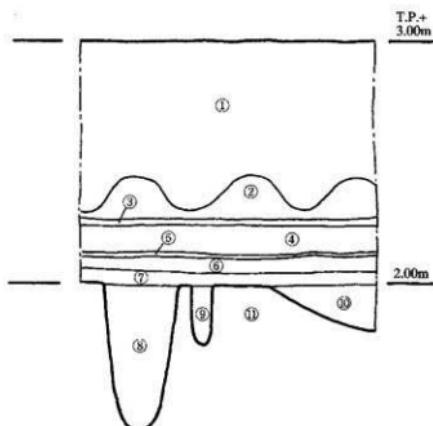
⑥ 黄灰色粘土 (2.5Y 6/1)。

⑦ ⑧よりやや暗い。集落遺跡に伴う包含層と考えたが、遺物量は少ない。この層のない調査区
もある。

⑨ 中世大溝の埋土。

⑩ 古墳の周濠の埋土。

⑪ 地山：灰黄色粘土 (10Y R 5/2)。
地山面のレベルは、T.P.+1.9~2.1mであり、この面で⑧・⑨・⑩の遺構を検出した。各遺構
の埋土の上層は地山と極めて近似しており、地山面精査の際の遺構検出に苦労した。



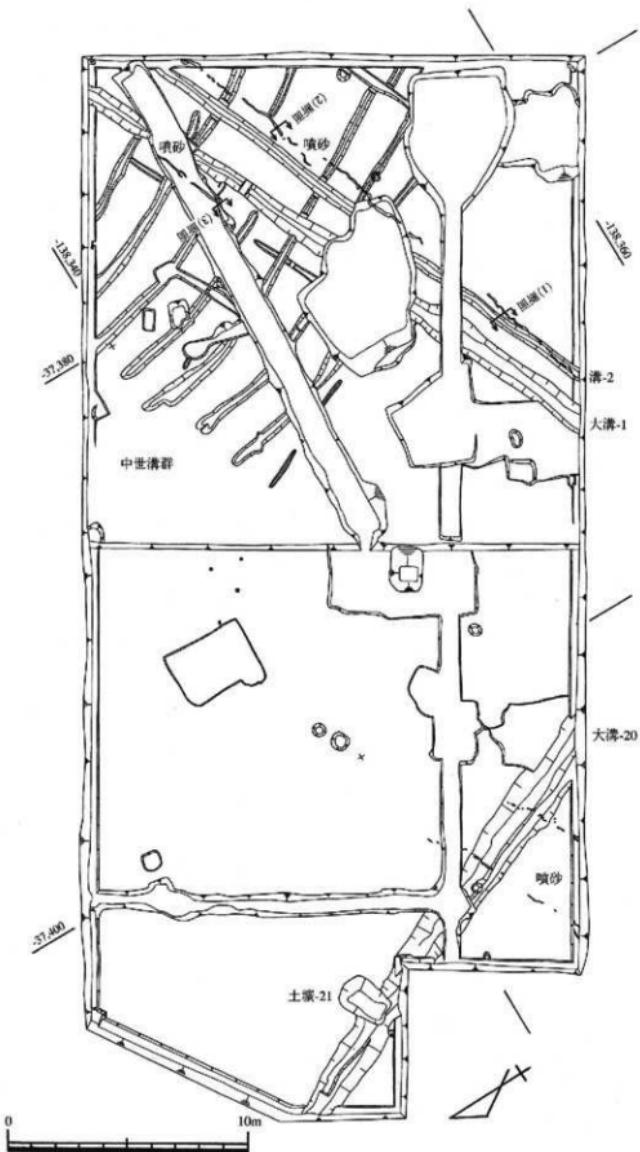
第5図 基本層序模式図

第3節 A区の調査

中世溝群

A区の東半部において検出した7条の平行する溝群で、1.3mのほぼ等間隔をもって走る。それ
ぞれの溝は、幅0.3~0.4m、深さ0.1~0.15m、埋土は黒褐色土である。検出長は16mであるが、
なかには途切れるものもある。方向はN-30°-Wで、その北西部が北に少し屈曲している。またこの遺構の北端はほぼ揃って終わっている。

遺構は、平行していること、等間隔であること、端が揃っていることの三点から、畑耕作に際
して歴を盛るために掘削した溝であることが推測できる。同様な溝群は、後述のE区でも検出さ
れている。近在の遺跡では、大庭北遺跡において「溝1~10」(府教委85年調査)、「中世小溝群」
(調査団85~6年調査)と報告者が呼ぶ遺構が、計4ヶ所見つかっている。



第6図 A区全体図

この遺構からは中世と思われる土師器の細片がわずかに得られたのみである。後述の12世紀末の大溝-1・溝-2に切られているので、それより以前のものであることは確かである。詳しい時期を言うには困難であるが、一応中世としておきたい。

大溝-1

A区の東半部において北東-南西に走る溝で、幅0.6~1.0m、深さ0.4~0.5m、検出長24m、方向E-25°-Nを測る。埋土は上層が浅黄色粘土で、周辺の地山と近似する。下層が灰黄色粘土となり、地山との違いが明確になる。下層の粘土は、この溝が滲水していた状況を示す。またこの遺構は、前述の中世溝群をすべて切って走り、後述のB区の大溝-34に繋がるものである。

出土遺物は、土師器・瓦器の細片がわずかに得たのみである。しかしこの遺構は、後述する大溝-20および他の調査区で検出した大溝と関係のあることが確実なもので、時期は12世紀末としておきたい。

溝-2

人溝-1の南に0.7~1.8m離れて、中世溝群を同様にすべて切って走る溝であるが、方向がE-20°-Nで、人溝と平行というわけではない。幅0.5m、深さ0.2m。B区の溝-33に繋がる。

出土遺物としては、土師器・須恵器の細片、摩滅した弥生式土器片があるが、遺構の時期の決め手となるものは出土しなかった。中世であることは確実である。後述するが、大溝-1より時期の古いものと考えている。

大溝-20

A区西端で検出した溝で、幅1.5~1.8m、深さ0.5~0.6m。埋土は、上層がにぶい褐色土で周辺の地山に近似するが、下層はブロックを含む灰色~灰黄色粘土となり、違いが明確になる。下層の粘土は、当時滲水していた状況を示す。方向はN-65°-Wで、前述の大溝-1とちょうど直角の関係にある。またB区で検出した大溝-35に繋がるものである。

出土遺物は、土師器・瓦器碗片が少量出土した。瓦器碗は、外面にミガキがわずかに残るものである。

土壙-21

A区西端に所在する遺構で、大溝-20と重なり合う。規模は1.4×2.0m、深さ0.6m。上層の埋土は、上層が灰黄色土、下層が橙色シルトと褐灰色粘土との互層で、水が溜まっていたものとは言えない。

この遺構は当初大溝の一部と考えて掘削したため、切り合い関係が不明となってしまった。埋土下層のうちの粘土が大溝に由来するものと考えれば、大溝を切ってこの土壙が掘削されたものとなる。この考えが最も合理的なものであろう。

出土遺物は、土師器・瓦器碗片がある。外面にミガキを残す瓦器碗片があり、大溝-20と時期的に差はないようである。

噴砂

地震に伴う噴砂の砂脈を4条検出した。東半部で2条、西半部で2条である。地山と砂脈とは色相が類似し、見ただけでは見分けることができない。しかし地山は粘質土であるので、精査の際の感触の違いによって容易に発見することができた。

噴砂は、地山面より0.8m下の粗砂層から噴き上げたもので、地山面においては幅1~4cmほどの亀裂状に砂脈となって現れる。そして砂脈は中世溝群、溝-2および大溝-20によって切られており、中世より以前の地震によるものであることは明白である。

東半部の砂脈の平面形は、およそW-15°~20°-Sの方向に走る。

東半部の砂脈に3ヶ所の断ち割りを入れて、断面を観察した。

第4節 B区の調査

古墳

B区の東半部で円墳の周濠を検出した。周濠は幅7~8m、深さ0.2~0.3m、埋土は黄褐色あるいは暗灰色粘土である。

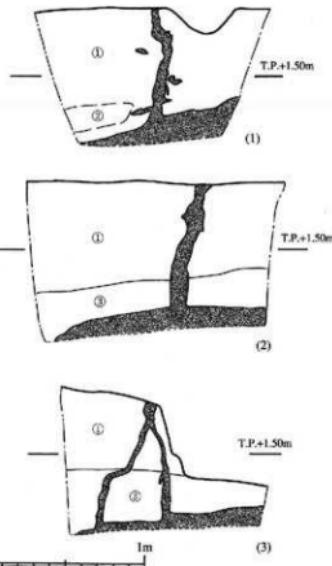
周濠は円を描き、隣のC・D区の溝-1、同2に繋がるものである。その内径は19mを測る。従って古墳は径19mの墳丘の周囲に、幅7~8mの周濠を持つ円墳であることが判明した。

墳丘は中世以降に全く削平され、主体部も同時に消失して田畠となった。地面上においては古墳という痕跡を全く残さないまま現在に至ったことになる。

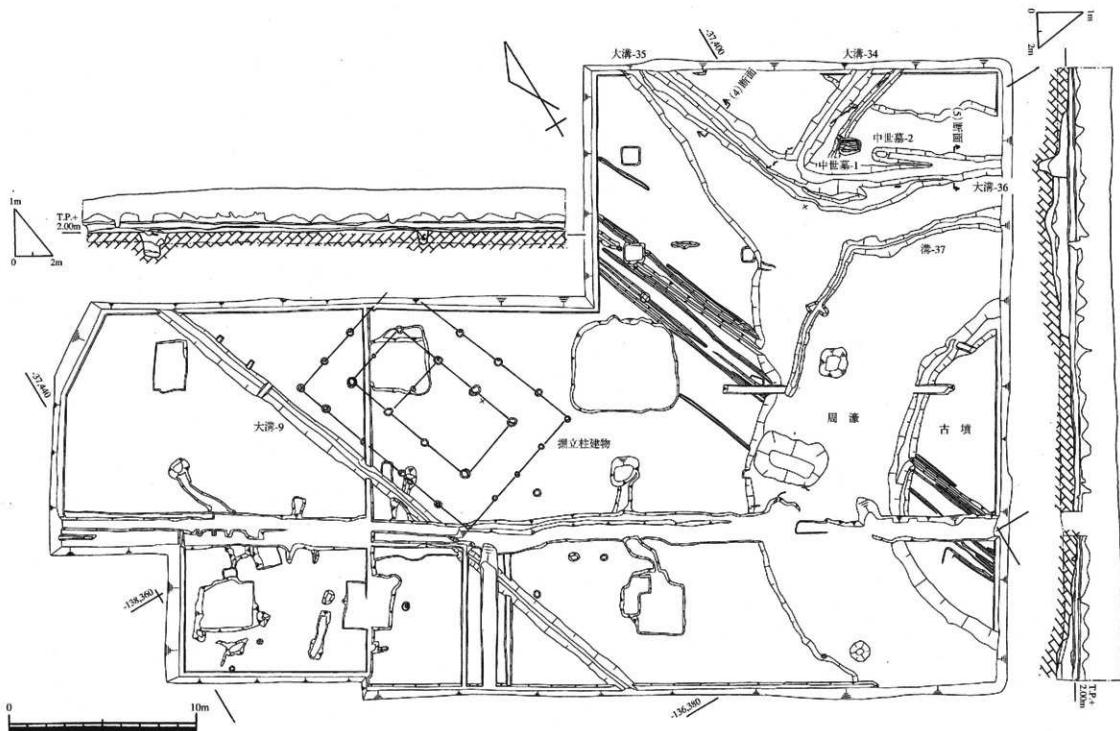
周濠内からの出土遺物は極めて少なく、本調査区部分からは岡化できるものとして提瓶があるのみである。

溝-37

古墳の周濠の西端から発し、その北肩を走って、C・D区の溝-1に繋がる溝である。幅0.4m、深さ0.1mで始まり、調査区端に近づくにつれて幅1.3m、深さ0.2mと大きくなる。埋土は灰色粘土で、古墳の周濠との区別が難しい。出土遺物が皆無で時期は不明と言わざるを得ない。しかし東側セクションを見る限り、古墳周濠に伴うことが明らかなものである。



第7図 噴砂の砂脈断面図（1~3）



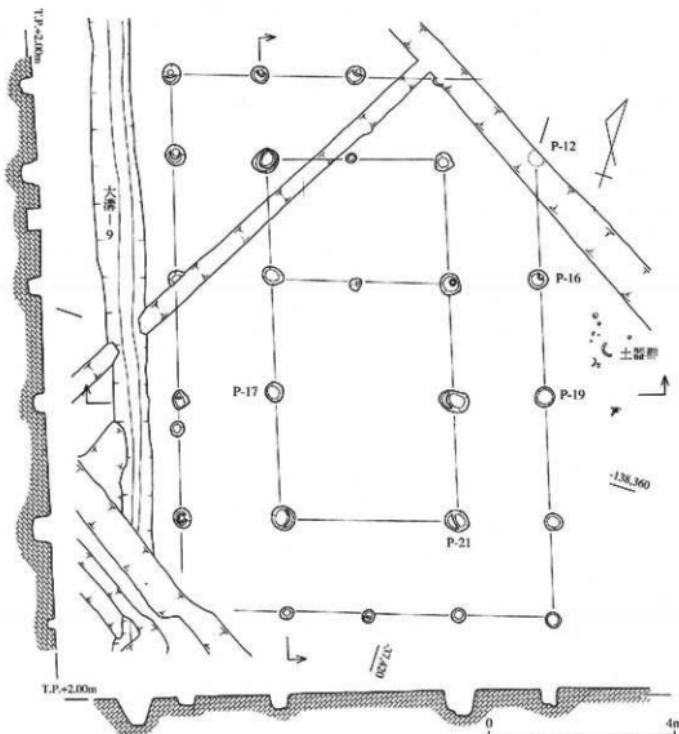
第8図 B区全体図

掘立柱建物

B区西半部で検出した建物跡である。東西2間(3.8m)、南北3間(7.7m)の母屋に四面庇を有する建物である。母屋から北庇は1.7m、西庇は2.0m、南庇は2.1m、東庇は1.9mとなる。建物の規模は、東西7.8m、南北11.5mで、面積は89.7m²となる。その方向はN-20°-Wを測る。

母屋部分の柱穴は径0.5-0.6m、深さ0.4-0.5mであり、庇部分のそれは径0.3-0.4m、深さ0.2-0.3mで、大きさに違いがある。屋根を支える柱と庇だけを支える柱との違いを示すものであろう。なお母屋の東西は2間であるが、真中の柱穴は南半部ではなく北半部のみにある。しかもその大きさは径0.2-0.3mと小さいものであった。

庇の柱穴の一つP-16には完形の土師器皿が埋められていた。また建物のP-16・19のすぐ外側で土器群を検出した。建物に伴う遺構であるのは確かであろう。



第9図 掘立柱建物平面・断面図

大溝—9

掘立柱建物—1より西へ0.4m離れて、平行かつ直線に走る溝である。建物の軒先を考えれば、建物に接する位置に掘られた溝と言える。幅1.0m、深さ0.6mを測る。埋土は、上層が褐灰色土、下層は建物より北側では褐灰色～にぶい黄橙色粘土のブロック層、建物より南側では黒褐色～灰色粘土となる。

この溝はE区の大溝—2と繋がり、またA区の大溝—20と約25m（1町の四分の一）離れてほぼ平行に走るものである。

大溝—34

B区北東端部で検出した溝で、A区の溝—1に繋がる。幅1.0m、深さ0.3m。埋土は上層が褐灰色土、下層が暗灰黄色粘土である。検出長6mの地点で、後述の大溝—35と直角に、同36とは55°の角度で合流する。検出面の精査を繰り返し、また断面の観察の結果、それぞれの溝との切り合い関係ではなく、同時期に機能していたものであることが判明した。

大溝—35・36

大溝—35はA区大溝—20から繋がる溝である。その西肩は二段状になる。検出長8mの地点で、前述の大溝—34と直角に合流する。この合流点で145°の角度で東へ屈曲して同36となって走り、C・D区の溝—1に繋がる。合流点における溝底のレベルは、T.P.+1.51mで、同35では北に行くに従って下がり、同36では南に行くに従って下がる。つまり合流点の溝底のレベルが、この両大溝において最も高いものとなっている。

ところで同36は、合流点より6.5mの地点で二叉状に支流と交わる。この支流は長さ2.5mである。断面精査を繰り返したが、大溝と支流とは切り合い関係にはなく、同一時期のものであることが明らかである。この支流の端で、中世墓—2が検出されている。

同35・36は別個の番号を付したが、本来は同一遺構である。この遺構がなぜ屈曲するのかについては、想像を述べるしかない。

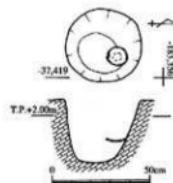
大溝は、前述の古墳の墳丘および周濠を避けるように屈曲して掘削されたものと見ることが可能である。すると、中世において古墳がなお存在し、それを破壊することが忌避されたのではないか、ということが考えられよう。

中世墓—1

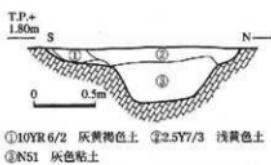
大溝—34と同36との合流点より1m東に離れた所で、中世の墓を検出した。

2m×0.9mの規模で、方形を呈する。深さは0.35m。方向はW—35°—Nとなるので南北方向ではなく東西方向の墓壙である。

墓壙の底には、長さ1.1m、幅0.12m程の板が5枚敷き並べたような状況で検出された。板材はかなり風化しており、検出時には厚さ数mmであった。釘は全く



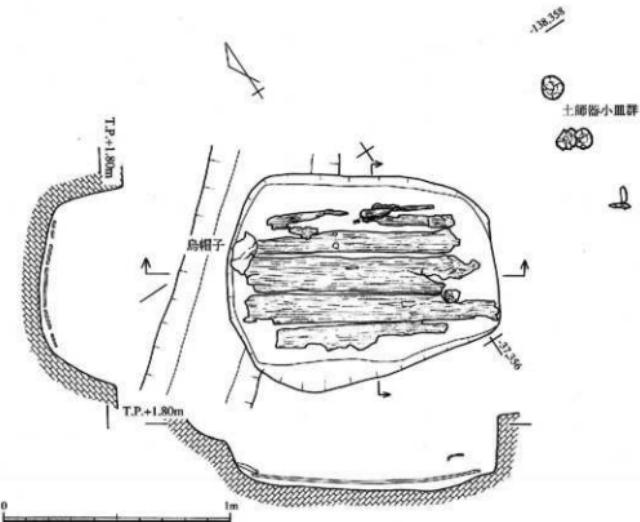
第10図 P—16



第11図 大溝—35断面図（6）



第12図 大溝—36断面図（5）



第13図 中世墓-1 平面・断面図

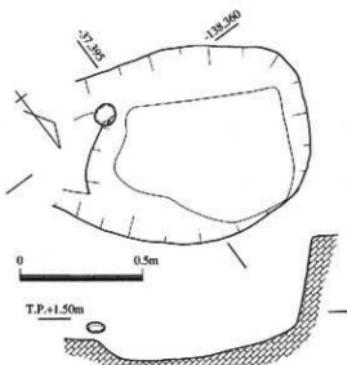
見当たらず、また側板や小口の痕跡はなかった。この墓は木棺ではないものと推定できる。

墓壙内の西隅で、底板の直上のレベルで鳥帽子が発見された。検出当初は単に黒い粘土塊と考えたが、布目および漆膜があったことから、鳥帽子と判明した。その大きさからすると、立鳥帽子ではなく折鳥帽子であろうが、原形がほとんど崩れており、復元は困難である。鳥帽子は墓壙の西隅でも北寄りの位置にあった。ここから推測するには、遺体は西に頭、身体と足を東に置いて、右手を下に左手を上にする横臥で、さらに足を折り曲げるという姿勢で安置したものであろう。

墓壙内の東半部で、遺体の脛に相当する位置に土師器小皿が1点出土した。また埋土中から土師器皿の破片を得ている。副葬品と言えるものは以上だけであった。

しかしこの墓壙より東へ0.5m離れた位置で、完形の土師器小皿が3枚出土した。墓前祭祀に関係するものと考えられよう。

結局この墓は、墓壙の底に板を敷き並べ、その上に鳥帽子を被ったままの遺体を、足を折り曲げて右下の横臥にし、足元に土師器小皿を置いた後



第14図 中世墓-2 平面・断面図

に土を入れて埋葬し、同時に墓前祭祀を行なったものと推測される。

中世墓—2

中世墓—1の南東0.6m離れて検出した。

当初は大溝—36の支流として掘削していたが、この部分の底だけが方形となったところから、溝ではなく土壙と判断した。そしてその内部にはほぼ完形の土師器小皿が出土し、また遺構の位置が前述の中世墓—1と並んでいるので、同じく中世の墓であろうと推測した。

墓壙は $0.9\text{m} \times 0.8\text{m}$ の方形で、深さ 0.4m 。埋土についてはその上層が大溝—36支流と類似し、区別がつかなかった。墓壙を切って溝が掘削された可能性を考えることができる。

墓壙内に土師器小皿以外に遺物の出土はなかった。

噴砂

東半部端で、A区の砂脈の続きを検出した。これは前述の大溝—35によって切られている。

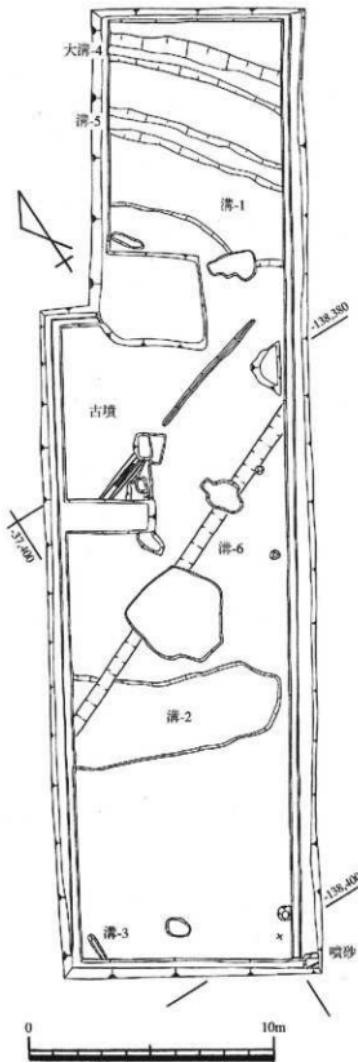
また古墳周濠底でも砂脈を見つけた。これは規模が小さく痕跡と言えるものである。確実なことは言えないが、周濠掘削後に見つけたので、周濠が砂脈を切ったものと考えたい。

第5節 C・D区の調査

古墳

B区で検出した古墳の続きをある。溝—2が南の周濠に相当する。幅 4.0m 、深さ $0.05\sim 0.1\text{m}$ を測るが、東にいくに従って浅くなり、調査区内で終わる。

北の周濠は本調査区では溝—1に相当する。幅 $4.5\sim 5.0\text{m}$ 、深さ 0.2m を測る。周濠内の北肩には、後述の溝—5が走る。またこの周濠の古墳の墳丘に沿った位置で、須



第15図 C・D区全体図

恵器坏が出土した。

溝-5

溝-5はB区の溝-37に繋がる溝である。当区では幅1.2m~1.3m、深さ0.2mと大きな溝となっている。出土遺物はなかった。

大溝-4

大溝-4は、B区の大溝-36に繋がる溝である。溝-5とは平行して走る。幅1.5m、深さ0.5m。出土遺物は上層で瓦器と土師器の細片がわずかに出土したのみであった。

溝-3

調査区の南西隅で検出した。幅0.3m、深さ0.1m、検出長1.2mを測る。後述のE区中世溝群の一角にあたる遺構である。

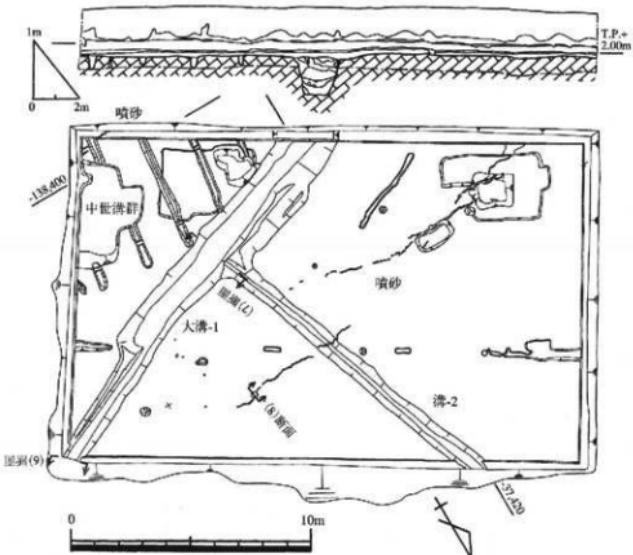
溝-6

調査区中央で検出した溝である。古墳中央のやや南よりの位置を斜めに走り、古墳の周濠である溝-2を切る。この遺構はE区の大溝-1に繋がるもので、遺物の出土はなかったが、中世のものであることは明らかである。従って中世の時期には、古墳はかなりの部分が削平されていたことになる。

噴砂

調査区南東隅の断面で、噴砂の砂脈を検出した。噴き上がった砂が地山面上で横に広がる様子を観察することができた。従って地山面は地震当時の地表面であることが判明した。

なお本調査区で検出した古墳と砂脈とは切り合い関係ではなく、先後は不明と言わざるを得ない。



第16図 E区全体図

第6節 E区の調査

大溝-1

調査区の東半部で斜めに走る溝である。南端から11mまで幅1.6~2.1m、深さ0.6~0.7mで、それより以北は幅1.0m、深さ0.6mと急に小さくなる。前者の大きな溝が後者の小さな溝を切ったという可能性は大きいにあるが、調査中には確認できなかった。今は後者の小さな溝が後述の溝-2と直角に交差していたものが、埋もれた後に前者の大きな溝が切ったものと考えたい。

埋土は、前者では上層が浅黄色粘土、中層が褐灰色・鉄分が多く含む青灰色粘土、下層が灰色粘土となり、後者では上層が灰色シルト、中層が鉄分を多く含む灰色粘土、下層が灰色粘土である。

出土遺物としては、瓦器・土師器の細片と白磁の破片等があるが、量的にはわずかである。

なおこの溝は、C・D区の溝-6に繋がる。

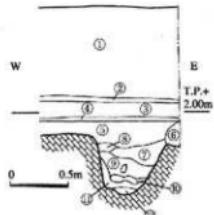
溝-2

調査区中央から北に向けて走り、B区の大溝-9に繋がる溝である。埋土は上層が黄褐色土、中・下層が灰色粘土～シルトである。大溝-1とはT字形に直角に交わるが、交差点における断面で、大溝-1が溝-2を切る様子が観察された。これによって、溝-2が埋もれてから大溝-1が掘削されたことが判明した。しかし出土遺物から見ると、時期差はほとんどないと思われる。

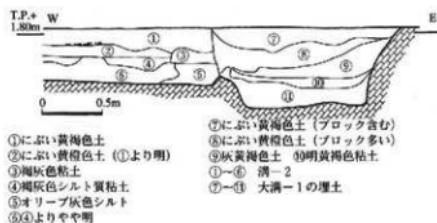
幅0.8m、深さ0.5mを測る。交差点より1.0mの地点で土師器皿片がまとまって出土した。

中世溝群

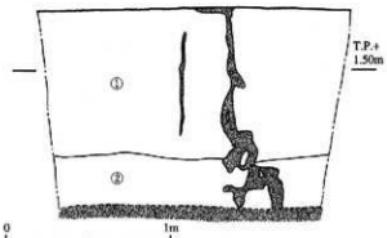
調査区南東部で5本の平行する溝を検出した。幅0.3m、深さ0.1mで、1.5mの等間隔に走る。C・D区の溝-3はこの溝群の一角であり、これを



第17図 大溝-1断面図 (6)



第18図 大溝-1・溝-2合流点断面図 (7)



第19図 E区噴砂の砂脈断面図 (8)

含めると7本の平行する溝群となる。またこの遺構は大溝-1によって切られている。

遺構はA区の中世溝群とその様相が極めて類似しており、従って同様の性格を有するものであろう。畑作の歴史に伴う溝と推測される。

噴砂

調査区中央および南東隅で、噴砂による砂脈を検出した。地山面より1.2m下の粗砂層からの噴砂である。また南東隅のものは、C・D区で検出された砂脈に繋がるものである。砂脈の平面形はW-15°-Sの方向に走る。この砂脈で1ヶ所の断ち割りを入れて、断面を観察した。

ところで溝-2はこの砂脈を切って掘削されている。A区のものと同様に、中世以前の地震であることは、ここでも明白となった。

第7節 F区の調査

掘立柱建物

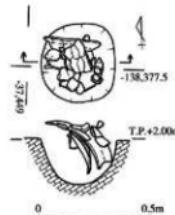
調査区中央～東半部で検出した。近年の搅乱によって柱穴が亡失しており、またこの遺構の一部が調査区外にあるため、確実なことは言えないが、東西2間(5.2m)、南北3間(6.6m)の母屋に四面庇を持つと考えたい。母屋の柱間寸法は南北が2.2mと等間隔であるが、東西は中間柱が等間隔の位置ではない。母屋から北庇は2.2m、西庇は2.5m、南庇は2.5m、東庇は2.1m離れて柱穴を持つ。

建物の規模は東西9.8

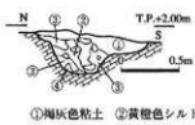
m、南北11.3mで、面積は110.74m²となる。

建物の方向はN-18°-Wを測る。

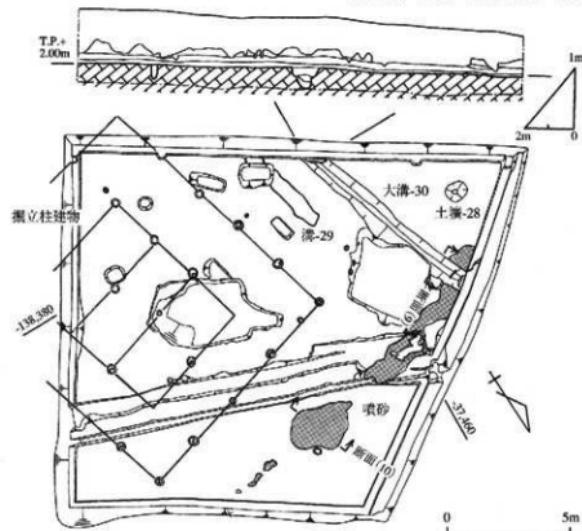
柱穴の規模は母屋と庇では違いはなかった。また庇の柱穴であるP-1・15、母屋の柱穴のP-4から遺物が出土している。



第20図 P-4



第21図 大溝-30断面図(9)



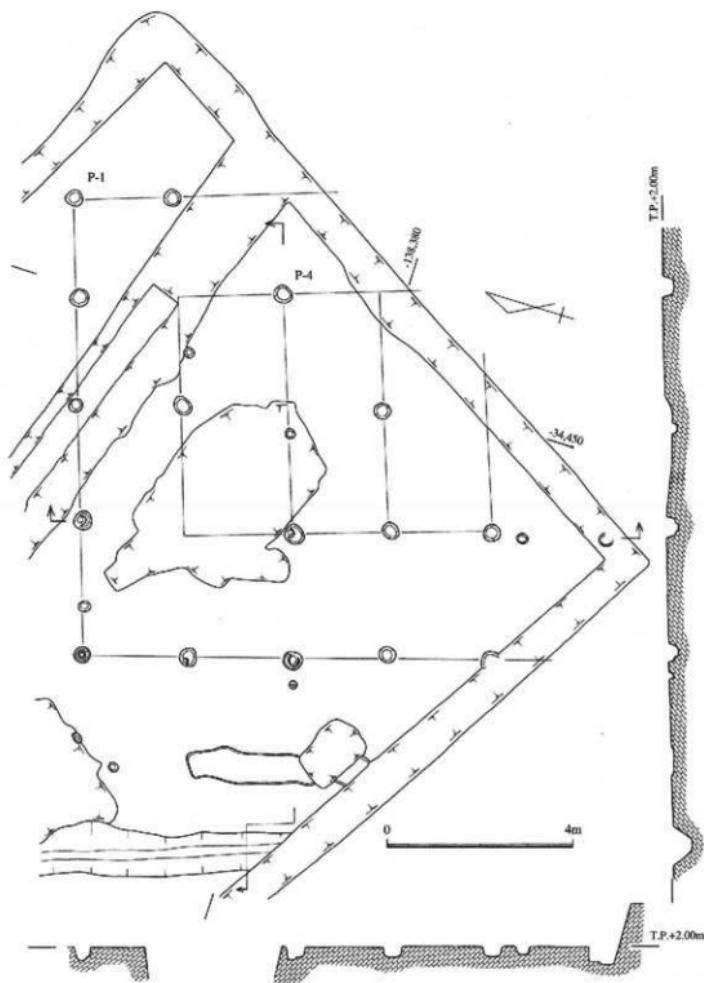
第22図 F区全体図

溝-29

掘立柱建物の西1.8m離れて平行して走る溝である。幅0.7m、深さ0.1mと浅いものである。検出長3.5mで終わる。掘立柱建物の雨落ち溝と推測される。

大溝-30

掘立柱建物より西に3.2m離れて平行に走る溝である。幅0.8m、深さ0.4~0.5mを測る。埋土は



第23図 F区 掘立柱建物平面図・断面図

上層が褐灰色粘土、下層がシルトブロック混じりの黄灰色粘土である。

出土遺物としては、上層から土師器小皿、下層から「ての字」口縁の痕跡を有する土師器小皿がある。

土壤-28

大溝-30から西に2.0m離れた位置で検出した土壤である。径0.8m、深さ0.4m。

当初井戸かと思われたが底が浅く、そうとは考えられない。今のところ意味不明の土壤である。

噴砂

調査区北半部で噴砂に伴う砂脈を検出した。0.9m下の粗砂層から地山面まで噴き上げ、その面で砂が広がって薄く堆積したものである。従って本調査区では、砂脈の平面形が亀裂状ではなく広がった状況での検出となった。またこの砂脈を延長すると、B区では途切れるが、A区で検出した砂脈と重なるものである。

大溝-30はこの砂脈を切って掘削されている。ここにおいても中世以前の地震であることが明らかとなっている。

第8節 出土遺物

古墳に伴う出土遺物

古墳から出土した遺物は少なく、図化できるものが7点だけであった。

(1) は須恵器蓋環で、外面に破片が熔着しており、また内面には同心円の當て具跡が残る。(2) も蓋環であるが、口縁部が欠損している。(3) は須恵器の提瓶で、腹部にカキ目を施すが、中央には施されず、指圧痕が連続する。(4、5) は須恵器壺の破片。(6) は子持ち壺の装飾部の一つである小壺。(7) は滑石製の紡錘車。

(1～3、5) は古墳周辺内から、(4、6、7) は古墳周辺の中世包含層から出土した。
なお滑石製紡錘車は、当古墳から240m離れた大庭北遺跡の古墳からも同様のものが出土している。

A区大溝-20出土遺物

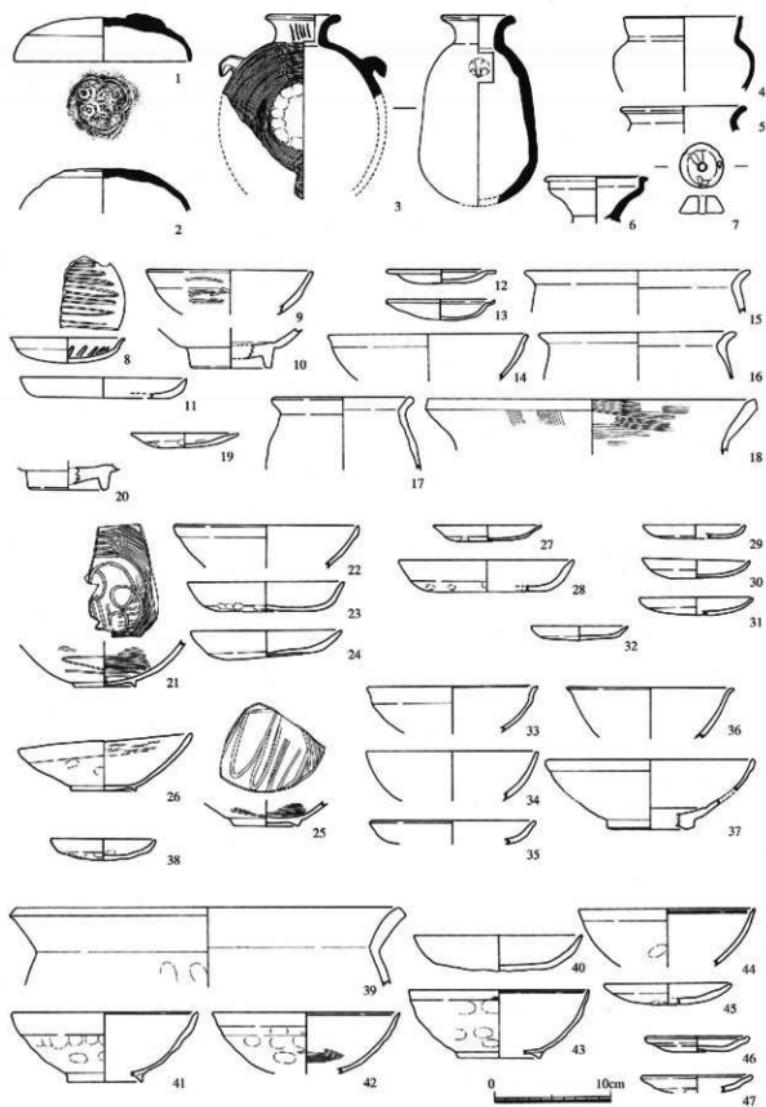
(8) は瓦器の小皿。(9) は瓦器碗であるが、内面は磨耗して調整が見えず、外面にわずかにミガキが見える。(10) は白磁碗の底部。(11) は土師器皿。

B区掘立柱建物

(12、13) は「ての字」状口縁の痕跡を残す土師器小皿。(14) は瓦器碗であるが内外面ともに磨耗しており、調整が不明である。口縁端部に沈線が見られる。(15～18) は土師器の煮沸具と考えられる鍋・釜の類である。以上の(12～18) は掘立柱建物のすぐ東側の位置にかたまつて



第24図 F区噴砂の砂脈断面図 (10)



第25図 梶遺跡出土遺物

出土したものである。

(19) の土師器小皿は、建物の柱穴の一つP-16内から完形で出土したものである。

(20) は建物の西に接して走る大溝-9内から出土した白磁碗の底部である。

B区東半部大溝出土遺物

(21) の瓦器碗は内面見込み部に螺旋状暗文、外面の一部にミガキの痕跡が残る。(22) は白磁碗片。(23、24) は土師器皿。(25、26) は瓦器碗。

以上のうち、(21~24) は大溝-36、(25) は大溝-34、(26) はこれら大溝の直上層からの出土である。

B区中世墓出土遺物

(27) は中世墓1内で、遺体の足元の位置で出土した土師器小皿。(28) はこの墓壙の埋土中から出土した土師器皿片。

(29~31) は中世墓1から0.5m離れた位置に置かれた土師器小皿群。

(32) は中世墓2内にあった完形の土師器小皿。

B区包含層出土遺物

(33) は瓦器碗であるが、内外面ともに磨耗している。口縁部端に沈線がめぐる。(34) は土師器の碗。(35) は土師器皿。(36、37) は白磁碗。

E区出土遺物

(38) は包含層中から出土した土師器小皿。当区では遺構からも含めて出土遺物は少なく、図化できるものはこれだけであった。

F区掘立柱建物出土遺物

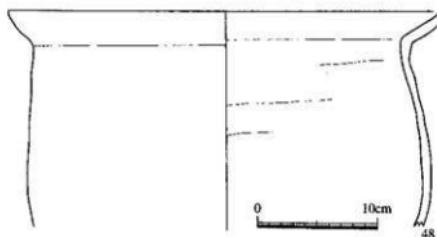
(39) は土師器鍋の口縁部。(40) は土師器皿。(41~43) は瓦器碗で、内外面ともに磨耗している。外面にはおそらくミガキではなく、口縁端部には沈線がめぐる。第26図の(48) は土師質の大鍋。

(39、40) はP-1から、(41) はP-2から、(42、48) はP-4から、(43) はP-15からの出土である。

F区大溝-30出土遺物

(44) の瓦器碗は磨耗して調整が不明。口縁端部に沈線。(45~47) は土師器小皿であるが、そのうち(46、47) は「ての字」状口縁の痕跡を残す。

(44、45) は埋土の上層、(46、47) は埋土の下層からの出土である。



第26図 F区P-4出土遺物

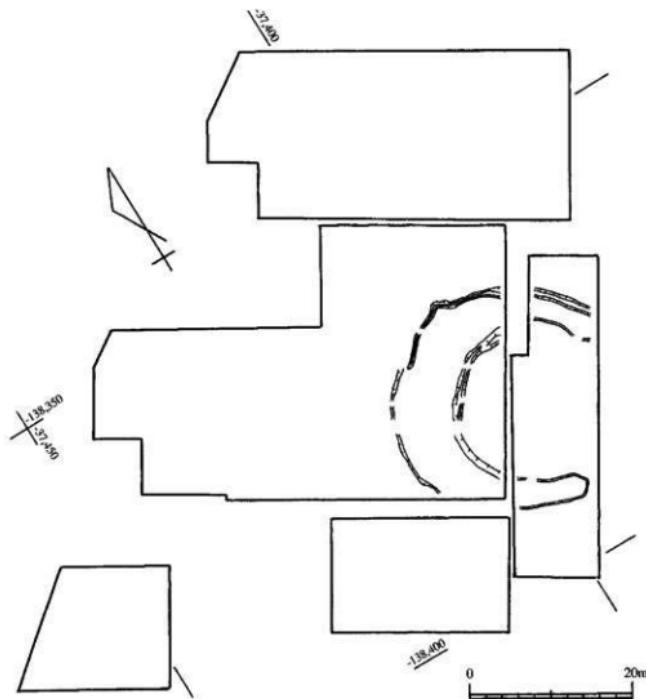
第3章 調査のまとめ

第1節 古墳時代

B区東半部とC・D区で古墳を検出した。古墳の墳丘はすべて削平されており、検出したのは周濠のみであった。古墳は径18mの円墳で、その周囲を幅8mの周濠が回る。周濠は南東部では浅くなり、北東部では深くなる。周濠内から須恵器壺、提瓶が出土しているが、遺物は非常に少ない。中世に時期にこの古墳は削平されたが、その際に混入したものとして滑石製紡錘車や須恵器片があった。

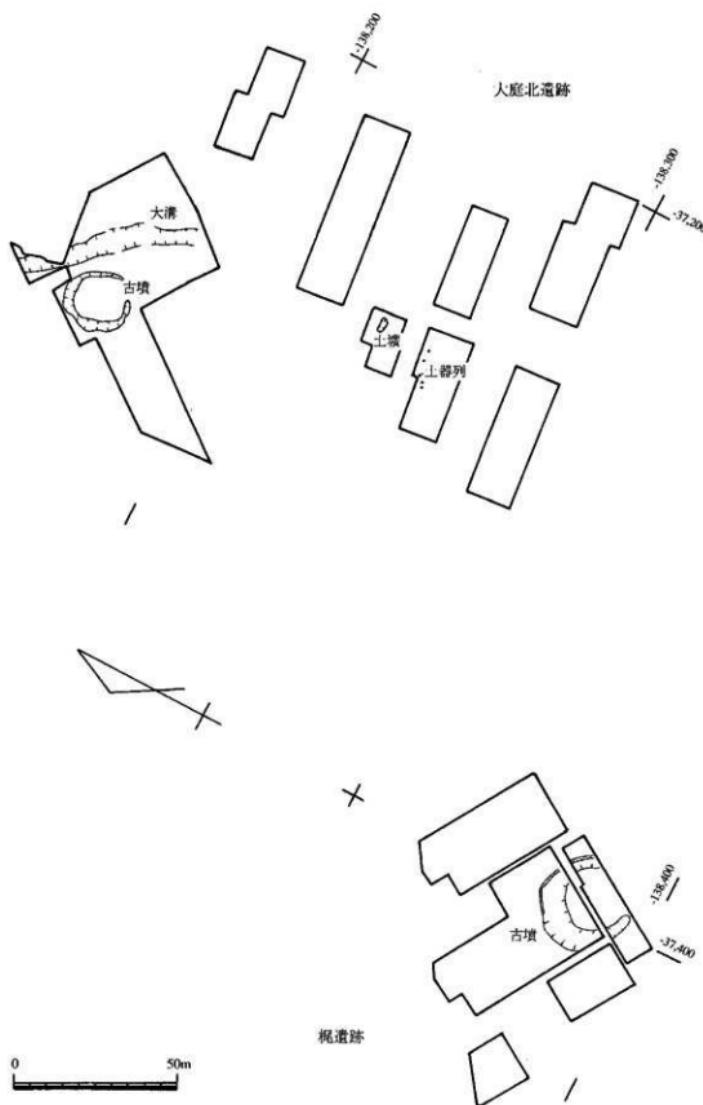
この古墳から北北東に240m離れた大庭北遺跡の調査区でも古墳が検出されている。一辺11.3mの方形墳で、墳丘は全くの削平を受けていた。滑石製紡錘車や各種の須恵器片の出土が報告されている。この古墳の東3mの位置に、幅6m、深さ0.7mの大溝が走る。

ここからさらに南へ80mの地点では、須恵器の大甕と提瓶を伴う土壌、その10m南では完形の須恵器が6点並んで出土した土器列が検出されている。



第27図 古墳時代の梶遺跡

以上の古墳・大溝・土壙・土器列の遺構は6世紀後半の同一時期と考えられる。



第28図 梶遺跡・大庭北遺跡の古墳時代遺構

第2節 中世

掘立柱建物2棟とそれを取り囲む区画大溝を検出した。

この付近は当時においても低地であったと考えられるので、大溝は建物を守るための排水溝であろう。この溝の埋土下層は滯水した状況を示す青灰色粘土であった。またこの溝は屋敷地を方形に区画割りするもので、溝間の距離は25mと38mである。B区東半部では、この大溝が直線ではなく弧状に大きく曲がっている。これは前述の古墳が当時まで残存し、それを避けて溝を通したためと考えられる。

掘立柱建物は区画に1棟ずつの状況で検出した。ともに2間×3間の母屋に、四面庇を有するものと思われる。

区画溝の交差点に近接した位置において、建物と同時期の墓を2基検出した。そのうちの一つからは烏帽子が出土した。

数条の平行する溝で構成される溝群遺構を2ヶ所で検出した。これは畑耕作の畝に伴う溝と考えられる。大庭北遺跡ではこれと同様の溝群が4ヶ所検出されているが、これも畑遺構であろう。

当時は15m

四方ぐらいい

の畑が散在

していた当

時の様相を

明らかにす

ることがで

きた。

以上の遺

構の時期

は、遺物か

ら見ると12

世紀中頃前

後と12世紀

後半～13世

紀初頭の2

時期に分け

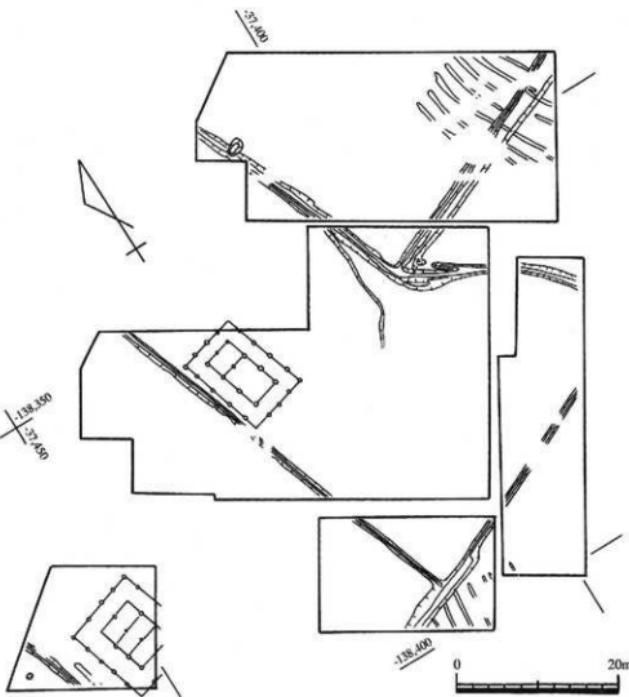
られるが、

遺物量が少

ないのでそ

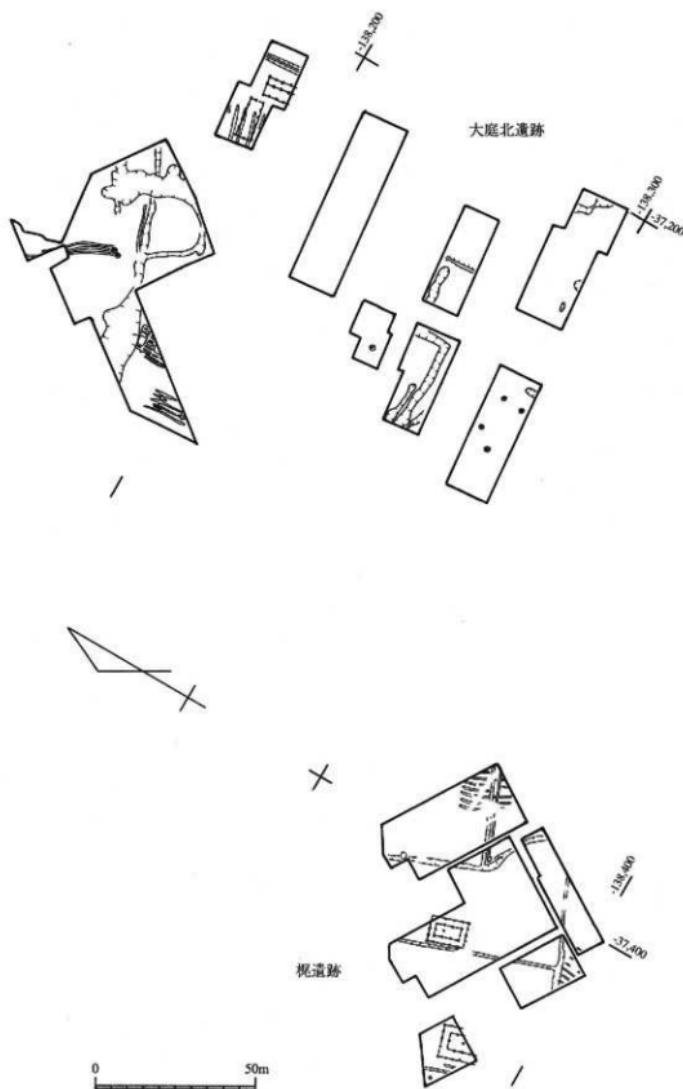
の時期がそ

のまま遺構



第29図 中世の梶遺跡

の時期と即断するわけにはいかないだろう。



第30図 桿遺跡・大庭北遺跡の中世遺構

第3節 噴砂

各調査区における地震に伴う噴砂の砂脈の平面図を合成してみた。

砂脈は途切れたり、方向が若干ずれたり、近接して二本が平行したりしている。これは地質の関係によるものであろう。しかし大雜把に見れば、5条の砂脈がW-15° - Sの方向に12~15mの間隔で平行に走っている様相が分かってきた。

ところで隣接の大庭北遺跡において、発掘調査当時の航空写真から砂脈の平面図を作成したところ、数本が近接して平行している様相を見ることができた。これを1条とすると、2条の砂脈がN-10° - Wの方向に60~70mの間隔をおいて走っていることが判明した。

両遺跡の砂脈の方向は5°違うだけで、ほぼ直角である。通産省工業技術院（当時）の寒川旭氏によれば、噴砂は周辺の地形や地下の埋没河川等々の状況に大きく影響されるものなので、方向の違いや間隔をおいて平行に走ることは気にしなくともよく、従ってこれらは同一の地震による噴砂と考えてよい、とのことであった。

噴砂の時期は、中世の遺構が砂脈を切っているので、それより以前であることは確実である。

次に古墳と

の関係では、

周濠内の砂

脈が周濠を

掘り上げて

から見つか

ったものな

ので、古墳

築造以前と

思われる。

また大庭北

遺跡の古墳

時代土器列

遺構は、位

置が砂脈と

重なってい

る。調査担

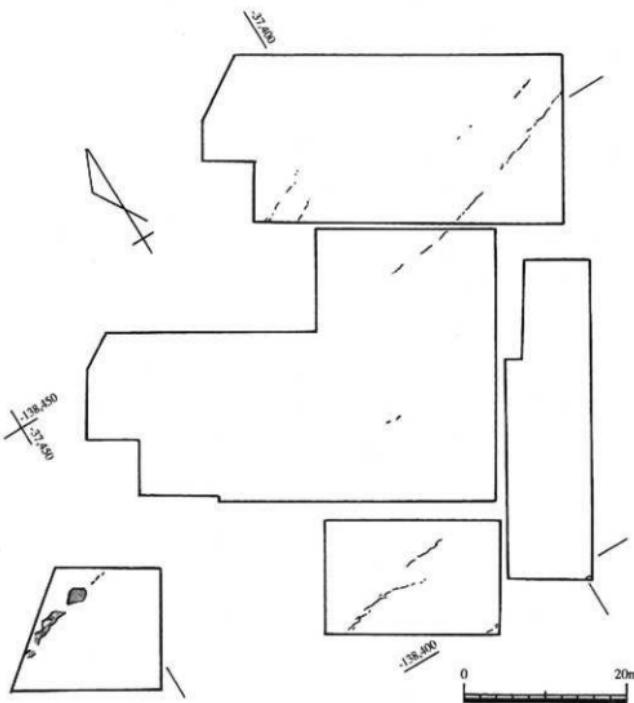
当者から話

を聞くと、

土器列はそ

こに置かれ

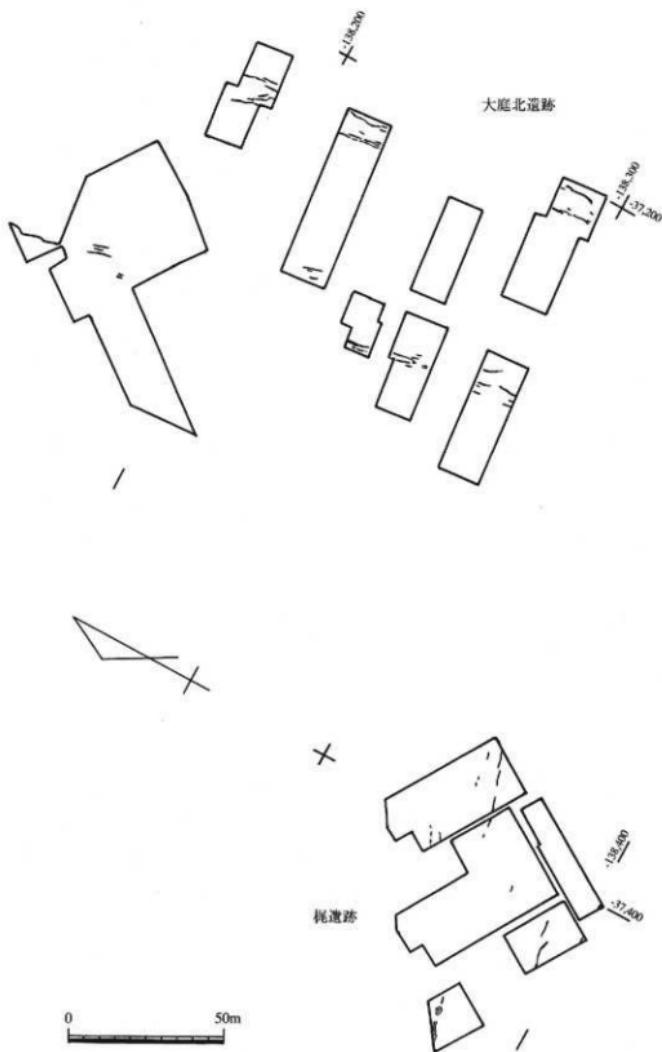
たような状



第31図 梶遺跡の噴砂の砂脈平面図

況で、噴砂によって動いたようには見えなかった、つまり噴砂の跡に土器群が置かれたのではないか、ということであった。

従って噴砂は古墳時代（6世紀後半）あるいはその直前の時期のものとなろう。



第32図 桟遺跡・大庭北遺跡の砂脈平面図

付章 松浦武四郎の石碑

柵遺跡発掘調査区より北東へ直線距離にして1kmの位置に佐太天神社がある。住所は守口市佐太中町7丁目である。この神社に松浦武四郎を祀るとする石碑が建っている。

彼が大阪府下に活動の痕跡を残していたのは、最近までほとんど知られていなかったことである。本調査区に近接した地点に歴史上の著名人に由来する遺物が残存していることを知るのは、文化財保護行政の一環として調査を進めるにあたり意味のあることなので、ここに報告するものである。

松浦武四郎について

彼はいかなる人物なのか。『国史大辞典』より引用して紹介すると、

江戸時代後期の北方探検家。文政元年（1818）二月六日伊勢国一志郡須川村（三重県一志郡三雲村）の郷士松浦桂介・母とく子の四男として生まれる。幼名を竹四郎、のち武四郎と称す。……天保四年（1833）から日本全国を遊歴し、同九年から長崎・平戸で僧となり名を文桂と改めたが、この間長崎の乙名津川文作から北方の事情を聞いて関心を強め、弘化元年（1844）帰郷して還俗したうえで単身北行した。同二年から嘉永二年（1849）東西蝦夷地、北蝦夷地、クナシリ島・エトロフ島を探査して『初航蝦夷日誌』『再航蝦夷日誌』『三航蝦夷日誌』などを著わし、安政二年（1855）幕府が蝦夷地を再直轄すると蝦夷地御用掛に起用され、同三年から同五年まで東西蝦夷地、北蝦夷地を探査して『竹四郎廻浦日記』『東西蝦夷山川地理取調日記』『（東西蝦夷）山川取調図』などを著わした。同六年江戸に帰って御雇を辞し、以降市井において蝦夷地に関する多くの著書を刊行した。明治元年（1868）東京府付属、同二年開拓使判官に任用され、北海道の道名・國・郡名を選定したが、新政府のアイヌ政策に同調できず、翌年辞任し、以後全国遊歴と著述の日を送った。明治二十一年二月一〇日没。七十一歳。……

一般的には日本の北方を探検し、「北海道」の命名者として著名な人物である。彼は明治維新後、天満宮（天神）を篤く信仰して聖跡二十五社を決め、巡拝を念願して各社に神鏡を奉納し、石碑を建てたとされる。明治十七年（1884）にはこれに関連して『天神二十五社順拝双六』を作成した。

佐太天神社は、この双六で「第九番 佐田天神」に相当する神社である。大阪府下では他に、
「第八番 道明寺天神」（道明寺天満宮） 藤井寺市
「第十番 天満天神」（大阪天満宮） 大阪市北区
「第十一番 露天神」（露天神社【お初天神】） 大阪市北区
「第十二番 福島天神」（福島天満宮） 大阪市福島区
「第廿四番 横州上宮天神」（上宮天満宮） 高槻市

の五社が挙げられている。

佐太天神社に遺存する松浦武四郎の石碑

佐太天神社においては、社殿に向かって右下に松浦武四郎の石碑が建っている。残念ながら下半部は欠失し、上半部のみの残存である。石碑の正面には

聖跡廿五拝

佐太天

第九番

と刻まれており、双六通りの「第九番」である。「佐太天」の下は欠失部となっているが、他の類例から「満宮寶前」となり、並んで揮毫者の名前があったものと思われる。

側面には、同じく他の類例から「発起人 東京 松浦武四郎」と刻まれていたものと考えられる。

石の材質は、灰黒色の安山岩系と思われ、府下の石造美術品によく見られる花崗岩〈御影石〉や和泉砂岩とは明らかに異なるものである。真野修氏によれば、江戸から明治時代にかけて江戸・東京で多く使用された伊豆半島産出の石材とされている。

前述したように松浦武四郎は、石碑だけでなく神鏡を奉納している。当佐太天神社においても日本画家の河鍋曉斎のデザインによる神鏡が奉納されており、今なお大切に保管されている。

石碑の拓本の採取および写真撮影の際には、佐太天神社宮司はじめ関係者の方々のご協力を得た。感謝の意を表したい。

府下の他の石碑

前述したように、府下では佐太天神社以外に五社が挙げられており、これらの神社にも松浦は神鏡を奉納し、建碑した。そのうち道明寺天満宮と上宮天満宮においては碑が遺存している。しかし大阪天満宮、露天神社、福島天満宮では碑は確認できなかった。

道明寺天満宮にある碑文は次の通りである。

(正面)

聖跡二十五拝

土師里天満宮寶前

第八番 従三位勲三等 鄉純造書 (印) (印)

(右側面)

東

発起人 松浦武四郎

京

また上宮天満宮にある碑文は次の通りである。

(正面)

聖跡廿五拝

土師里天満宮寶前

第二十四番 従五位勲五等 加藤□謹書(印)

(左側面)

東京

発起人 松浦武四郎

どちらも同じ天満宮名が刻まれている。「土師里」は藤井寺市道明寺周辺の古地名であり、從って社名の由来は推測できる。しかし、高槻市ではこのような地名は過去においても現在においても管見では存在しない。古い神社名であったかも知れない。

なお「第八番」「第二十四番」という番号は、双六通りの番号である。

ところで前者の揮毫者である「郷純造」は明治時代の大蔵次官、男爵、貴族院勅撰議員で、長男の誠之助は大正～昭和前期の実業家、財界の指導者として著名である。

後者の揮毫者の「加藤某」は不詳。

京都に遺存する石碑

京都では次の六社が聖跡とされ、それぞれで建碑されている。

「第一番 菩原院天神」(菩原院天満宮) 京都市上京区

「第二番 錦天神」(錦天満宮) 京都市中央区

「第三番 菩大神」(菩大臣天満宮) 京都市下京区

「第四番 吉祥院」(吉祥院天満宮) 京都市南区

「第五番 長岡天神」(長岡天満宮) 長岡京市

「第廿五番 北野天満宮」 京都市上京区

以上のうち石碑の遺存が確認できたのは、菩原院・菩大臣・吉祥院の三天満宮である。それぞれの碑文は次の通りである。

菩原院天満宮

(正面)

聖跡廿五拝

菩原院天満宮寶前

第一番 巖谷修敬書

(右側面)

顕主 松浦武四郎

世話人 烟増尾

揮毫者の「巖谷修」は、一六で著名な書家。明治維新後に詔勅・制令の淨書を行い、内閣書記官、元老院議官、貴族院議員を歴任した。

世話人の「畠増尾」は不詳。

菅人臣天満宮

(正面)

聖跡廿五拝

菅人臣天満宮寶前

第三番 従五位黙五等 金井之恭謹書

(右側面)

東京 松浦武四郎

発起人

西京 畠増尾

揮毫者の「金井之恭」は、明治時代の官僚、書家。内閣書記官、元老院議官、貴族院議員を歴任した。晩年は日本書道会会长。

吉祥院天満宮

(正面)

聖跡廿五拝

吉祥院天満宮寶前

第四番 望月黙雷拝書

(右側面)

発起人 東京 松浦武四郎

資材主 駿□

□尻 望月治三郎

揮毫者の「望月黙雷」は不詳。なお同時代の著名人に真宗僧侶の島地黙雷がいるが、彼が望月姓を名乗ったという記録は見当たらなかった。

資材主の「望月治三郎」は静岡県の江尻に在住する名家。

奈良に遺存する石碑

奈良では次の二社が聖跡とされ、建碑されている。

「第六番 長谷寺喜山」(与喜山天満宮) 桜井市初瀬

「第七番 吉野大威徳」(威徳天神社) 古野郡吉野町吉野山

両方ともに石碑の遺存が確認できている。それぞれの碑文は次の通りであるが、揮毫者や願主についての記載は不詳。

与喜山天満宮

(正面)

聖跡廿五拝

與喜山天満宮寶前

第六番 東京□□行誠書（印）

(右側面)

東

発起人 松浦武四郎

京

威徳天神社

(正面)

聖跡廿五拝

威徳天満宮寶前

第七番 正五位 杉浦誠謹書

(右側面)

発起人 松浦武四郎

東京

願主 杉浦誠

なお松浦は明治21年2月10日に没しているが、遺言により同年5月に大台ヶ原に分骨を埋納させている。同24年に追悼の墓碑が建てられた。記録では、この碑は「東京より持ち来た」もので、「碑文は南摩綱紀（羽峰）、書は市河三兼」とある。昭和11年10月には大台山頂で松浦翁五十年祭典が催された。

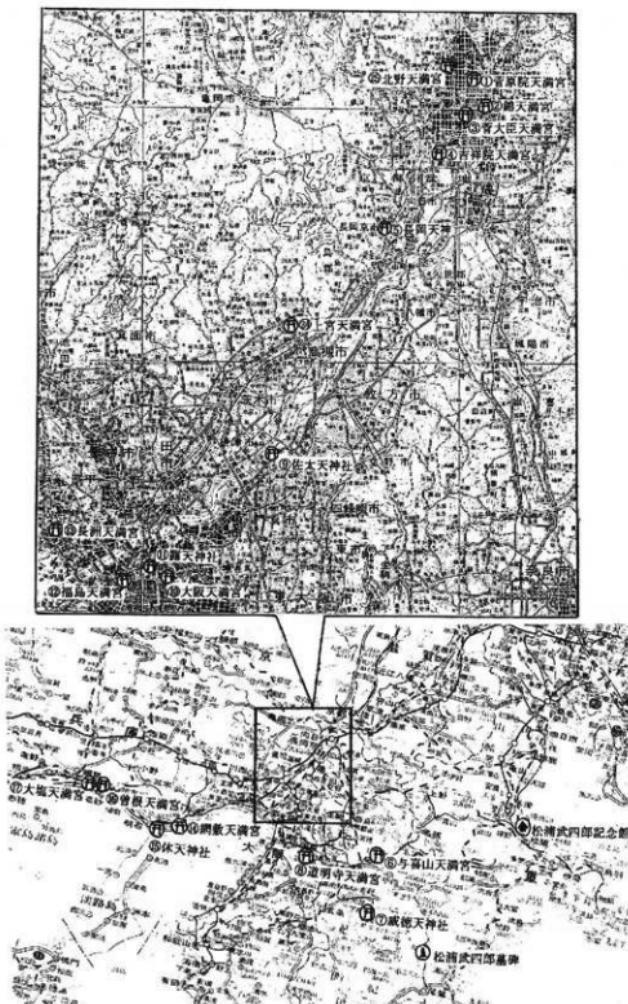
参考文献

真野修「失われた松浦武四郎の石碑」（『歴史と神戸』194号 1996年2月）

真野修「曾根天満宮と松浦武四郎」（『神麗』24号 曾根天満宮社報 平成9年7月）

「松浦武四郎翁略歴」（『大和志』第三卷十 昭和11年10月）

加美山史子「松浦武四郎の天満宮二十五靈社奉納と河鍋曉斎」（『曉斎』72号 平成13年1月）



第33図 松浦武四郎の石碑等位置図

報告書抄録

ふりがな	かじいせき
書名	梶遺跡
副書名	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2001-3
編集者名	辻本武
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区人手前2丁目 TEL06-6941-0351(代表)
発行年月日	2002年3月

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	°'"	°'"			
かじいせき 梶遺跡	もりぐちし 守口市 さたひがしまち 佐太東町	27209	18	34° 45' 7"	135° 35' 29"	2000年7月 ～2001年1月	2,950 府営住宅 建替

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	特記事項
梶遺跡	古墳	古墳時代	径18mの円墳	
	集落跡	中世	掘立柱建物2棟 土塙墓2基 方形区画の大構	四面庇の建物 墓塙内から鳥帽子出土
	地震跡	古墳時代後期以前	噴砂の砂脈	

図 版

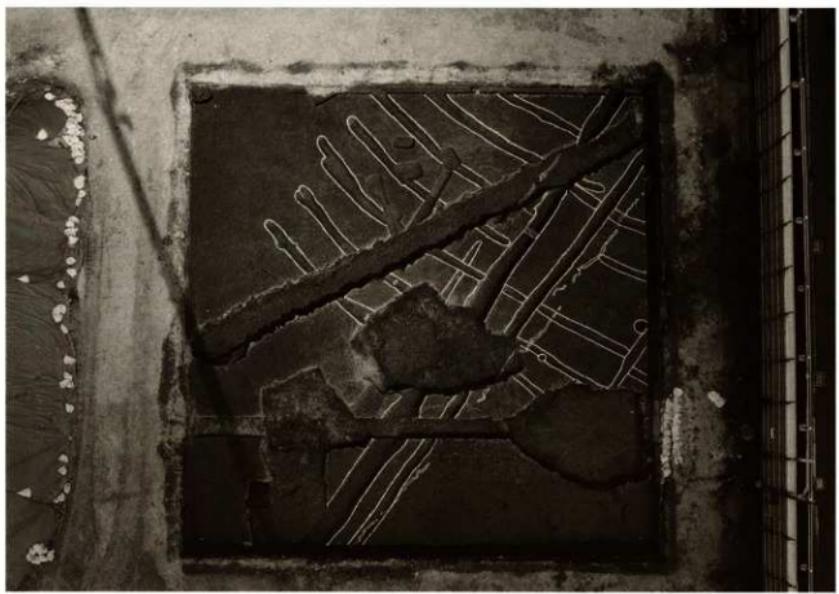


概要図 (南から)

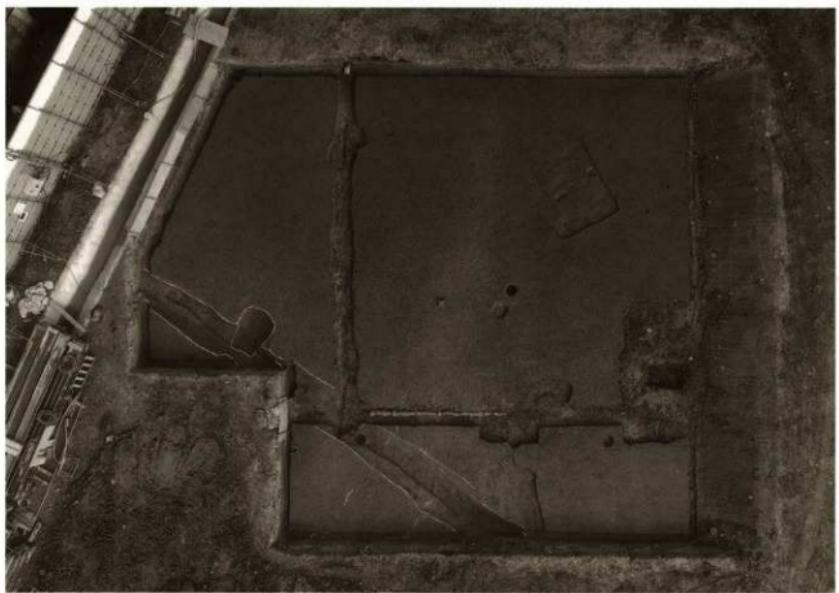
図版一 梶遺跡調査区垂直モザイク写真



図版二 A区垂直写真



東半部



西半部

図版二
A区全景と遺構



東半部（北から）

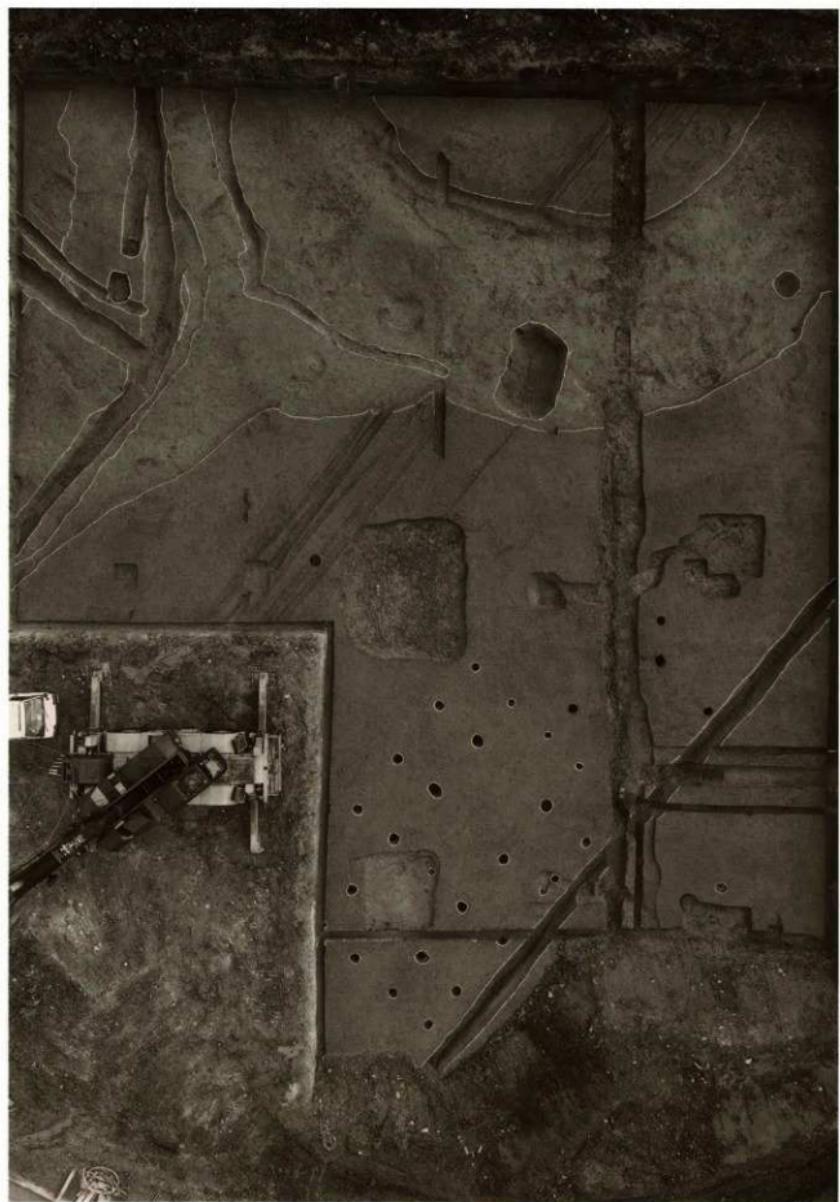


西半部（北から）



大溝-20断面（東から）

図版四
B区東半部垂直写真



図版五
B区東半部全景



(東から)



(西から)

図版六
B区西半部全景と遺構



西半部全景（北から）



掘立柱建物（西から）



P-12断面

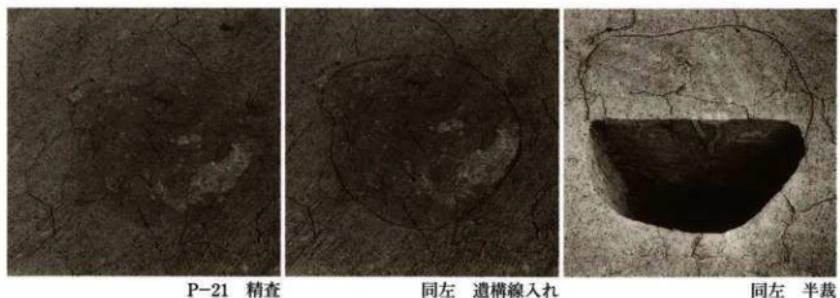
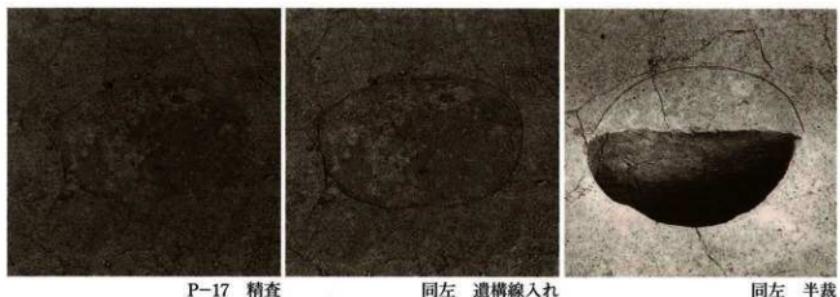
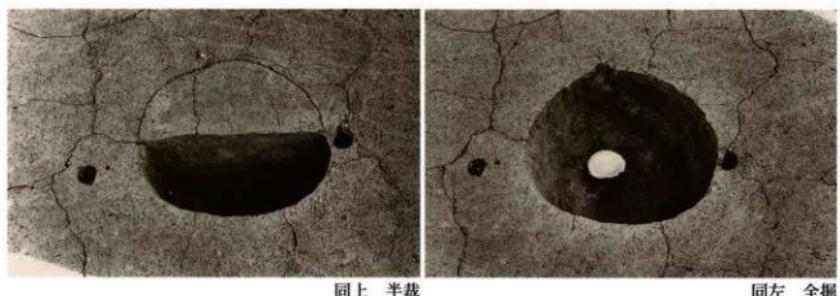


掘立柱建物の外側の土器群

図版七 B区西半部とF区垂直写真



図版八 B区掘立柱建物柱穴の発掘





中世墓-1（北から）



同上（東から）



鳥帽子出土状況



中世墓-2（北から）



中世墓周辺の土師器皿出土状況

図版十 C・D区とE区垂直写真



C・D区



E区



C・D区全景（南から）



C・D区北半部（北から）

図版十二 E区全景と遺構



E区全景（東から）



大溝-1（北から）



溝-2（東から）

図版十三 F区全景と遺構



F区全景（北から）



掘立柱建物（西から）



P- 1



P- 4

図版十四
B・E・F区大溝断面



B区大溝-9 (北から)



B区大溝-36 (西から)



E区大溝-1 (東から)



E区大溝-1 (西から)



E区大溝1と2の交差点 (西から)



E区溝-2 (南から)



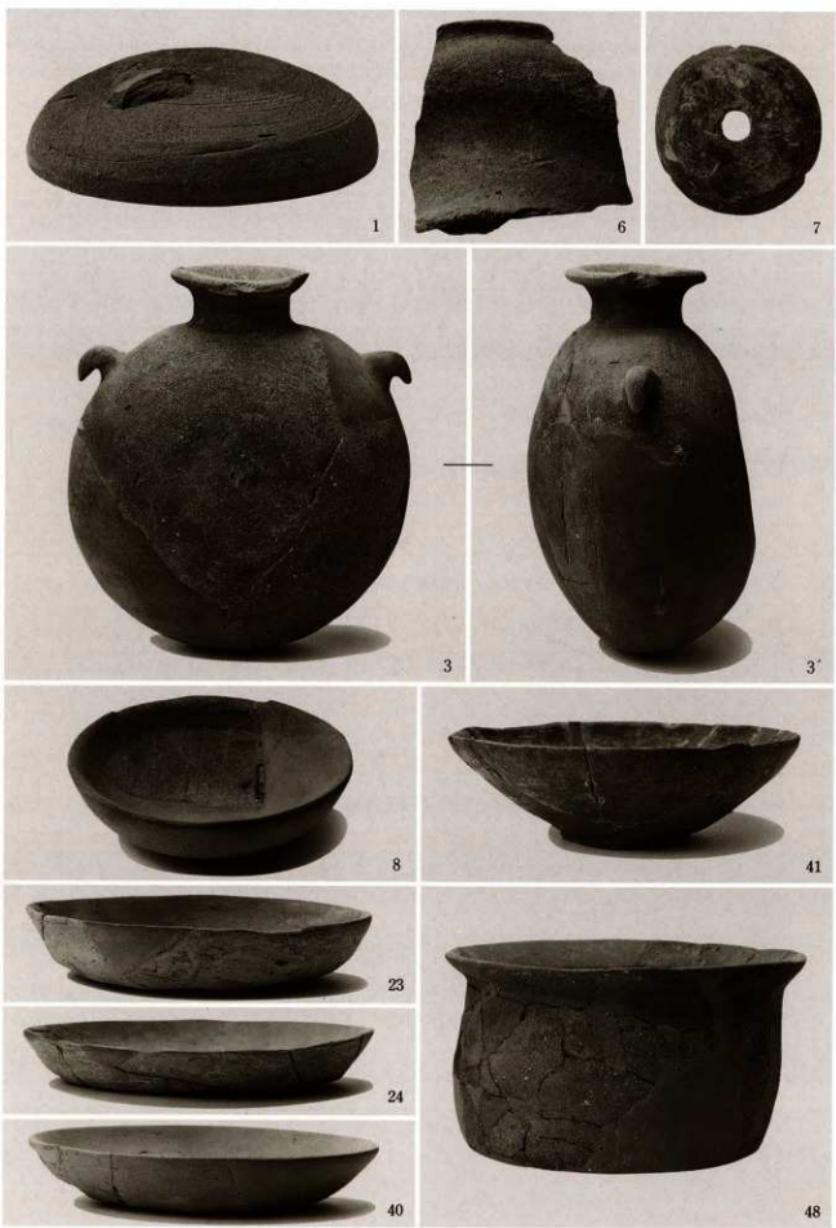
F区大溝-30 (線入れ前)



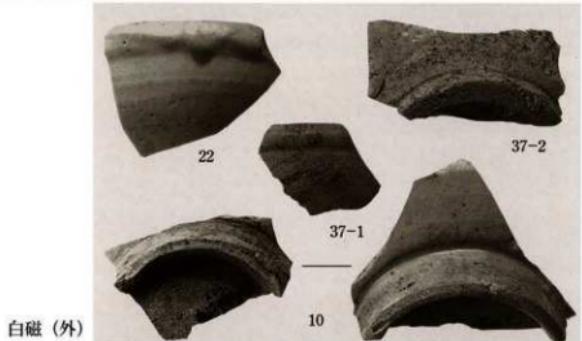
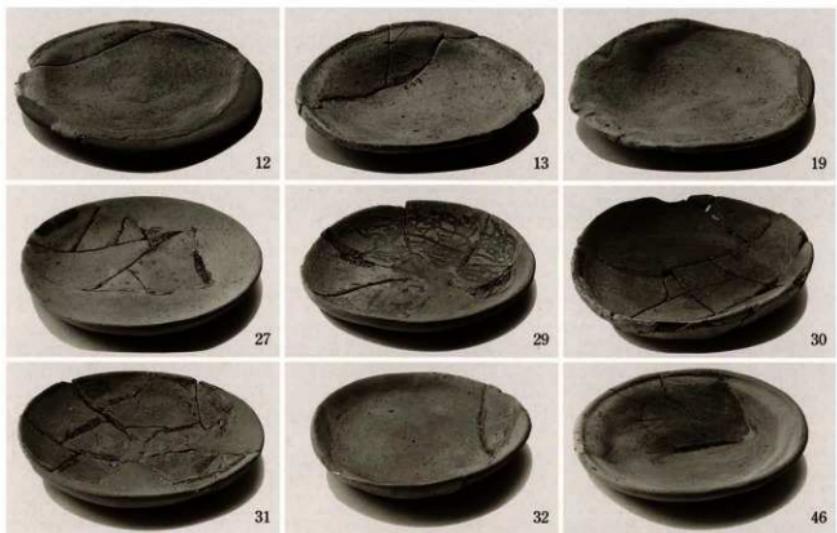
同左 (線入れ後)

図版十五 梶遺跡出土遺物

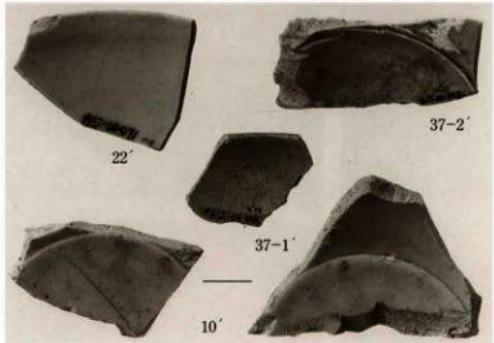
(1)



図版十六 梶遺跡出土遺物 (2)



白磁（外）



白磁（内）

図版十七 噴砂の砂脈断面写真



A区噴砂1（南）



A区噴砂1（北）



A区噴砂2



C・D区



E区



F区

図版十八 大庭北遺跡の噴砂跡垂直写真



85年度調査1区中央



85年度調査2区東端



83年度調査2区中央

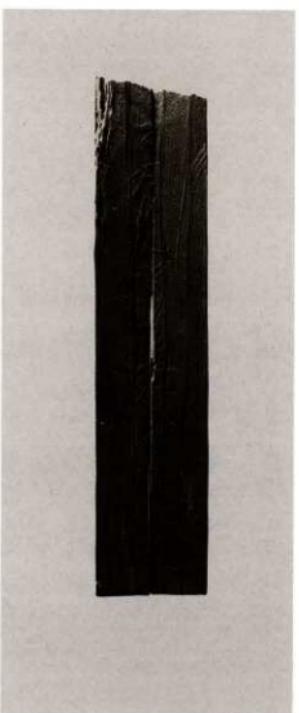


83年度調査3区東端

「□□□□ □ □ □□
料備米三斗也仍所定如件
正和四年二月 日 (花押)」



木簡（表）



木簡（裏）

「美濃」



刻印須惠器



佐太天神社社殿



佐太天神社の石碑



松浦武四郎製作「双六」にある佐太天神社



石碑の拓本



第8番道明寺天満宮



第24番上宮天満宮



側面に刻む「松浦武四郎」



第1番苔原院天満宮



第3番苔大臣天満宮

(側面)



第4番吉祥院天満宮



第6番与喜山天満宮

(側面)



第7番威徳天神社



第15番休天神社
(明石市)

第16番曾根天満宮
(高砂市)

大阪府埋蔵文化財調査報告 2001-3

梶遺跡

2002年3月29日発行

編集・発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351（代）

印刷 凰清印刷（株）

TEL 06-6902-7201

